みずみどり

2025年2月1日　第166号

発行：いたばし水と緑の会

年会費 2,000 円　郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会
http://mizumidori2.eco.coocan.jp
E-mail：mizumidori@nifty.com
連絡先　坂本　郁子　板橋区中台2－27－E505

自然界のリサイクル
落ち葉はゴミじゃない

落ち葉だけではありません。枯れた草も、刈った草も、切った枝もゴミではありません。トンボ池のような小さな場所で、落ち葉が腐葉土になり、カブトムシが卵を産み、秋には幼虫が育っていました。カブトムシの幼虫は、枯葉を食べるのではなく、腐った落ち葉を食べます。

写真はトンボ池の堆肥置き場と、腐った落ち葉にいたカブトムシの幼虫。

堆肥置き場には、カブトムシだけではなく、ダンゴムシやミミズもいます。ダンゴムシやミミズも枯葉より少し腐った落ち葉をたべています。彼らが食べて出した糞は、さらに土に近くなります。

枯葉や枯れ木を分解する微生物って何？

微生物は見えないけど、枯草菌は土壌や植物に普遍的に存在すると書いてあります（納豆菌も枯草菌の一種）。木を食べて成長するシイタケのようなキノコも分解者（腐朽菌）。シイタケを収穫した後のホダ木はボロボロになっています。
カラカラに乾いた木や葉より、水分があった方が微生物はよく働いてくれます。

（写真左地面に生えたキノコ、右上は切り株に生えたキノコ、右下弱った木に生えたキノコ）

枯れ木を利用する生き物、分解する微生物

トンボ池の奥にボロボロになった枯れ木があります。
２０１６年４月、清水さんが切った枯れ木（トチノキ）です。枯れ木を利用する生き物もいるので、１．４mほどの高さで伐採。切るのに苦労されたと思います。２０２５年１月、８年余り経った今も枯れ木はしっかり残っています。幹はボロボロになって、生き物たちが食べたり、空隙に住んだりして利用しています。「これはビオトープ（注）だ」は清水さんの言葉。ボロボロの枯れ木は、まだまだしばらくこのままここにいて、なくなるまでたくさんの生き物が利用し、土になるまで時間もかかるのです。

（注）ビオトープは生物の生息空間という意味ですが、わたしたちは生物が住みやすいよう維持している場所（トンボ池やバッタ広場も）をビオトープと考えています。

自然のお掃除屋さんいろいろ

カラス

都会では生ごみをあさっているけれど本来は森のお掃除屋さん、ザリガニの死骸も片付けてくれます。
写真は3月下旬、枯れ草を口いっぱいにくわえたカラス。巣に敷くために用意しているのですね。ドングリまなこがかわいかった。
枯れ草も野鳥の巣材になるのですね。

虫たち

虫は人気がないですね。きれいなチョウチョやタマムシ、かっこいいカブトムシ・クワガタはいいけど、幼虫は見たくない人も多い。拒絶反応を起こさない人も、地味な虫は、見ようと思わないと見えないのです（私もそうです）。しかし、自然界に大切な存在だと知ってから、注目し、彼らの仕事ぶりを紹介したいと思いました。

腐った葉を食べる虫（カブトムシの幼虫）（1ページの写真）
腐った木を食べる虫（コクワガタの幼虫（左下）

モリチャバネゴキブリ（右）森林性で朽木や死骸などを食べる。バッタ広場にもトンボ池にもいますが、家の中には入ってきません。

左：センチコガネ（糞を食べる）
右：シデムシ（死骸を食べる。写真ではセミの死骸を食べている）

自然界では、様々な生き物が関わって、刈った草も木も生き物の死骸も残らず自然（土）に戻ります。
公園で掃除された落ち葉、草、木などは、どうなるのでしょうか。
堆肥になるのか、バイオマス発電になるのか、それともゴミとして焼却処分されるのか？・・・

伐採されたクヌギと木の子供達

城址斜面の腰の曲がったクヌギ（写真左）。伐採予定でしたが、しばらく様子を見ましょうということで、命拾いをしたのもつかの間。1 年ほどで伐採されました。高木のてっぺんを観察できる貴重な木でした。クヌギに来る虫、花、ドングリが大きくなるようすを見て楽しませてくれましたが、残念。都会の木の運命ですね。

１月１２日、切り株を見に行きました。切り株は直径３２ｃｍ～３８ｃｍ、年輪を数えてみました。

木の中心は年輪が粗く成長が早い。外側の年輪は細かくて見にくい。後日虫眼鏡で数えましたが、適当に４０年以上としました。

日暮台公園で大木１０本が伐採された時も年輪を数えました。だいたい４０年～６０年くらいだったと思います。木は根から水を吸い上げ、葉で光合成してでんぷんをつくり、幹までおりてきて、幹を太らせます。春夏には大いに成長し（色が薄い）、秋には成長が衰え（濃い色になる）、濃淡で１年になります。どうやってでんぷんが幹を太らせるのでしょうか。植物の働きはすごい。切られたクヌギは条件がよければ萌芽します。見守っていきましょう。

ところで、クヌギの子供がバッタ広場の外に生えています。バッタ広場の外側の草刈りをやめてから生えてきました。切られたクヌギの子孫かもしれないと思い、保護する気になって篠竹で囲いをしました。土が固くて難儀しました。こんな固い土に根を下ろしていくんですね。踏まれて倒れても、折れない限り生きていて、もう６年くらいたっていると思います。バッタ広場の外側を草刈りされた時もありましたが、根が残っているので、また生えてきたのでしょう。

公園や樹林地で次世代の木が育たないのはなぜ？。それは機械で何度も下刈りするからです。種が芽生えたばかりは、ドングリの栄養で育ちますが、日当たりが悪いと、ドングリの栄養が尽きるとそれまでです。また何度も切られると木の子供は育っていけません。

浮間公園から荒川河川敷へ
植物観察を中心に（1月19日）

浮間が池には渡り鳥のカモが水辺に浮かび、岸辺にはサギも。

浮間公園には仕事で近くまで行ったことがあったが、公園の中に入ったのは初めて。
板橋区内の公園は、コンクリートなどで整備してあるところが多いが、浮間公園も同様。鳥見が中心の観察会だが、私は大寒前後の植物の様子にとても興味をひかれた。
葉や花が落ちて、幹と枝が青空をバックに天を目指している姿がすがすがしい。

池の端のメタセコイヤとラクウショウ。
実をたわわにつけているセンダン。
枝を四方八方に伸ばしている銀杏。
桜や桂のふっくらし始めた冬芽。
荒川河川敷土手のチガヤ（？）の紅葉。
河川敷の白い実をつけたナンキンハゼの木。

この冬は時々寒波が押し寄せてくるが、比較的暖かいこともあり、ロゼット状の緑が多い。枯れ草の隙間から覗くと見えるモチクサやタンポポ。

真冬であっても自然の営みに休みがない。昨年の夏から秋の名残があるが、もう春に備えて動いているのだ。

葉が落ちているからこそ見える景色がある。

なんでも分からないこと、知らないことを坂本さんに尋ねれば答えが返ってくるものと遠慮なく聞くのだが、慎重な坂本さんは「かもしれないけど、はっきりは分からないわよ。今はインターネットでも調べやすいからお家に帰ってから調べて教えてちょうだい」とおっしゃる。

そうおっしゃる坂本さんも、ナンキンハゼについては観察会当日の夕方メールで知らせてくださった。
ナンキンハゼの実は、最初は緑色、その後に黒くなり、外果皮がむけると白くなる。
白い色をしているのは、ろうの成分のためだという。昔ハゼはロウソクの原料になっていたので、中国から来たハゼで、ナンキンハゼと命名されたとか（雨宮清子）

荒川の土手

枝に残ったセンダンの実，ふにゃふにゃしていて中の種は大きくて溝がある。

ナンキンハゼ？の白い実

捕獲し続けてわかったことは「アメリカザリガニはとにかく強い」

昨年まで池の水を抜いて、落ち葉やヘドロを掻き出し、傷んだあぜを直していましたが、高齢ボランティアではそれも難しくなり、この冬は水をたたえた池のままです。
秋になってザリガニの動きは鈍くなりました。が、池の水が凍っても生きて、食べています。
ペットボトルのトラップにかかったザリガニは中小が多く数も少ないですが、エサも食べるし、たまに共食いされた個体もあり、トラップにかかるので、1週間設置して回収しています。

２０２２年　４００匹
２０２３年　３５０匹
２０２４年６月～９月　集中的に捕獲　５２４６匹
２０２４年１０月～２０２５年１月２５日　５７２匹

２０２４年は布施さんがペットボトルのトラップを改良工夫し、アナゴカゴ、もんどりを使い、集中的にザリガニを捕獲し、６月～９月で５２４６匹になった。５２４６匹ですよ！！。トンボ池の大きさから考えると信じられない数です。ザリガニがすむため池が近いこと、土でできた池はザリガニにとって住みやすい場所あること、ザリガニが雑食性で、落ち葉も水草もヤゴもなんでも食べるとなれば、エサに困らない環境で、捕獲されながらもがんばって繁殖し続けていたことになります。それでも個体数は減ったはずで、繁殖を上回る捕獲を続ければ、今年？来年？はトンボのヤゴも見られるかもしれません。

活動・観察記録（12月～2025年1月）

トンボ池

カブトムシ幼３、ベッコウバエ、キイロテントウ、ジョロウグモは１２月中までいた。キチジョウソウ花
渋柿にメジロ飛来（以前はメジロ、シジュウカラが頻繁に群れで来て柿をつついていたが、今年はあまり見ないような。渋柿は今年豊作だったためか、1月末になっても柿が残っている）
アオサギ飛来（ため池）、キカラスウリ実（ため池公園）、

バッタ広場

ナミテントウ、キイロテントウ、ツヤアオカメムシ、
バッタ広場は、裏の斜面林の樹木が伐採され、下刈りもされて、以前より明るい環境になりました。昨年秋から日当たりのよい中央部を集中してササを刈ってきましたが、今秋冬も、枯れ始めた野草も一緒に**中央部からササを徹底的に刈る**ことにしました。ササを刈ったあとに、ハルジオン、セイタカアワダチソウ、ハコベ、カラスノエンドウやヤエムグラの緑が出てきました。
刈るのは全域ではなく、刈らない場所、クズが茂るヤブを残しています。クズは多くの昆虫の食草だけでなく、身を隠す場所でもあるので、夏も大切な場所として残しています。冬場は、枯れたクズに覆われたヤブは、越冬する生き物が利用できる場所と考えています。時々藪の中から野鳥の鳴き声が聞こえます。ウグイスかしらん。

活動のお知らせ

活動の問い合わせ等は　坂本まで　０９０－４６１８－１２９５

１　赤塚城址ビオトープちょっと観察と手入れ（第２日曜日）どなたでも

城址をちょっと観察してから、ササ刈り等の作業をやります（カマは用意します）。草や土に触って自然を感じてね。

２月９日（日）１０：００～１１：００　　バッタ広場の作業をします

３月９日（日）１０：００～１１：００　　バッタ広場の作業をします

集合場所：板橋美術館そばの赤塚トンボ池前

参加費：無料（保険には加入していません）

もってくるもの：汚れてもよい靴と服装・作業手袋、あれば図鑑、虫眼鏡など、

２　赤塚ビオトープの手入れ（第４土曜日）

バッタ広場のササ、枯草を刈って春植物の出現に備えます。

２月２２日（土）１０：００～１１：００

３月２２日（土）１０：００～１１：００

集合場所：板橋美術館そばの赤塚トンボ池前　汚れてもよい靴と服装で。作業手袋、

３　日暮台公園と樹林地の観察（第１日曜日）　　１０時日暮台公園前集合

４　赤塚公園の湧き水と生き物（カエル）調査（どなたでも）

３月１６日（日）１０：００～１１：３０（小雨実施）

集合場所：赤塚公園サービスセンター前

持ってくるもの：温かい服装で、ゴム手袋

問い合わせは、坂本まで０９０－４６１８－１２９５

●ボランティアの参加を歓迎します。ご意見や自然情報もお寄せください。
　ホームページ　http://mizumidori2.eco.coocan.jp
いたばし水と緑の会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、ビオトープ（赤塚トンボ池と赤塚公園バッタ広場）などの観察と手入れ作業、日暮台公園自然樹林地の定点調査などを行っています。観察と手入れを通して、季節の変化や新しい発見があります。不定期ですが区外の自然や保護活動の見学も実施しています。
●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」（隔月発行）をお送りします（年会費2000円：振込先は表紙に記載）。